

# Agora

寺西重郎 副学長

藤田和也 機構長

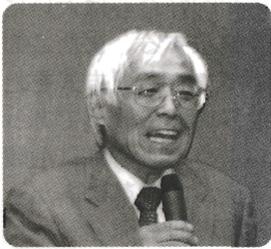
創刊号 (No. 1)

2001. 3. 15. 発行 一橋大学教育研究機構

初めまして...

機構ニュース「Agora」が発行されることになりました。

## 機構の制度的確立を 学長 石 弘光



現在、存在する大学教育研究機構は、単なる学内措置で正式な機関として独立したものではない。5年前にキャンパス統合が実現したおり、概算要求が通らなかったこともあり、教務担当の事務官1名が機構の事務を担当するという形で発足した。しかしそれ以降、小平分校に代わり教養教育を担う組織として機能してきた。このままの状況は、今日まで依然として続いている。

小平分校の時代も、教養課程に所属する教官は4学部に分属していたが、小平分校という物理的な空間があり教官組織として、一体感があつたように見うけられた。キャンパス統合後インテグレーションが進む中で各学部への帰属がより密になった側面がある一方、教養教育の核になる機構ならびに機構長(昔の分校主事)の影が薄くなってきた。やはり制度的

な裏付けがないのが、一つの大きな原因のようだ。

その中でも、矢野前機構長と藤田機構長の努力もあり、2年続けて教養教育シンポジウムが開催された。私はごく一部しか出席できなかったが、教養教育に関し多くのことが語られ、改善策が検討されていた。このようなことをふまえ、目下2002年度予算の概算要求に向け、機構を制度的に確立させるべく組織作りを始めている。藤田機構長の協力により、企画が着々と進められている。大学教育のあり方を研究する組織として、教養教育の開発、IT教育、FD、生涯教育などを核として、大学教育総合研究センター(仮称)にしようとする構想である。

この度、機構ニュースとしてAgoraが創刊されることになったことは、実に喜ばしい。新しい機構の整備に関し、関係者の自由な意見交換は不可避である。このような意見の交換を通して、新しい機構の構想が実り、そして新たな制度として実現することを切に祈っている。(2001年2月20日記)

## 目次

- |   |   |                         |   |
|---|---|-------------------------|---|
| ・機構の制度的確立を 石 弘光 学長                                | 1 | 第2回教養教育シンポジウムを終えて       |   |
| ・ある教育改革 寺西重郎 副学長                                  | 2 | 大学教育研究機構長 藤田和也          | 6 |
| ・意見交流の広場に 藤田和也 機構長                                | 2 | 果報は寝て待て? 矢野敬幸           | 7 |
| ・特集! 一橋大学Faculty Development<br>(第2回教養教育シンポジウム)報告 |   | ・訪問! 機構関係の教材準備室等の紹介 第1回 |   |
| 第1セッション風景   | 3 | 語学ラボラトリー                | 7 |
| 第2セッション風景   | 4 | 視聴覚教育教材制作・管理室           | 7 |
| 共通科目の改革努力 藤田和也                                    | 5 | ・平成12年度大学教育研究機構年次報告     | 8 |
| 第2セッションの司会を担当して 橋本正博                              | 5 | ・教育研究機構所属助手一覧           | 8 |



だいぶん前に読んだ『ハーバードの世紀』(R.N. スミス、早川書房)という本の中に、1970年代のハーバード大学でデリック・ボック学長の下で、教学部長ヘンリー・ロソフスキー教授の行

なった一風変わった教養教育改革の話がでていいる。ロソフスキー教授は故大川一司教授の共同研究者であり、私ともちょっとした知己の間柄なので、いささか印象が残っている。

この教育システム改革の柱は、教養教育をその「方法」を基準に5部門(社会分析と道徳論考、自然科学と数学、歴史、文化と芸術、外国語と外国文化)に整理し、方法の訓練を強化すること、および教養に関する知識偏重の概念的、通論的講義を減らし、かわって特殊個別的問題についての高度に分化した講義をふやすことである。このためたとえば学生は「アメリカ史(I)」とか「古代東洋学」、「自然科学(I)」などにかえて「20世紀初頭の黒人の文学運動」とか「青銅器時代中国の政治と神話」とか「19世紀の肺結核」などの講義を教わることとなった。

これを読みかえしながら、私が大学2年生のとき受けた渡辺金一教授の経済史概論の講義を懐かしく思い起こした。この講義は、たしか中世ビザンツの都市と農村の物産と交易の様子をこと細かにレクチュアするもので、およそ「概論」とは言えない代物であったが、妙に経済史という学問の面白さと興行きを感得させられた気になった。

ロソフスキー教授の大胆な改革の効果がどうであったかとか、その後の変遷とかは残念ながら不勉強の私はフォローしていない。少なくともこのやり方ではいわゆる総合力の養成がじゅうぶんかどうか疑問が残る。しかし他方で学生の知的好奇心は大いに刺激されたのではないかと言う気がする。またこのアイディアは4年一貫教育の下でつみあげ方式をとる一橋のカリキュラムとはかなり異質の改革であって、この改革そのものを推奨しようとする気は毛頭ない。しかしながら、教育システムの改革にあたっては、教育法などについての不断の研究開発が不可欠であることは言うまでもないが、場合によっては大胆な発想に基づき抜本的な改革を行なうこともありうるのだとおもいを強くもった次第である。

## 意見交流の広場に

## 大学教育研究機構長 藤田和也



矢野前機構長からバトンタッチをした際に、いくつかの宿題を託されました。そのうちの一つがこの「機構ニュース」の発行でした。機構の助手の方々の編集協力をいただいてようやく創

刊できることになり、ホッとしています。今後、定期的に発行しながら、機構の活動の広報と教育活動や教育条件のあり方について、教職員の(時には学生も含め)意見交換の場にしていきたいと考えています。タイムリーで、ホットな、核心をついた編集を心がけていきたいと思っておりますので、よろしくご愛読とご寄稿・ご投稿のほどをお願いします。

なお、現在、発足以来の最大の懸案事項であった機構の体制整備のための概算要求に向けて、大学執行部のもとで改革案を検討中です。いずれ近いうちに成案を得て皆様のご検討をお願いしたいと考えています。これらを含め、今後ともよろしくご協力をいただけますようお願い致します。

### Agora

古代ギリシアの都市国家において市民生活の中心をなした広場。市民たちは好んでここに集まり、政治を談じ、交友を楽しんだ。また市場としての役割も果たした。

(講談社「大事典desk」より)

特集！ 一橋大学Faculty Development

(第2回教養教育シンポジウム)報告

昨年、12月21日(木)に、

一橋大学における教養教育の現状と課題-4年一貫教育への移行後の教養教育はいま-と題して第2回シンポジウムが開かれました。



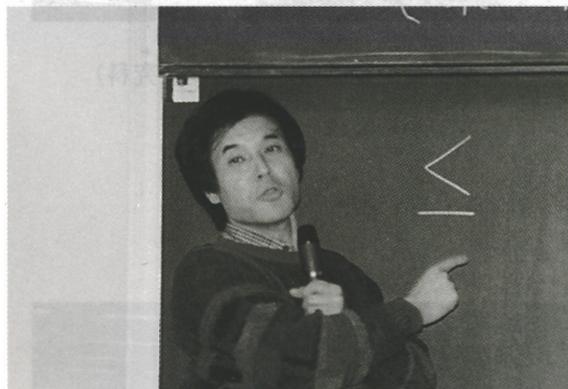
①外国語「英語グループの試行錯誤」  
塚田富治教授(言語社会研究科)



②自然「サイエンスミニマム-理科離れへの対処」  
矢野敬幸教授(商学研究科)

第1セッション：  
共通科目の現状...

司会：松永正義教授  
(言語社会研究科)



③数理「数学における4年一貫」  
山田裕理教授(経済学研究科)



④運動文化「なぜを問うスポーツの授業」  
高津勝教授(社会学研究科) / 早川武彦教授(商学研究科)

## 第2セッション： 総合科目の現状...

司会：橋本正博教授  
(法学研究科)



伊豫谷登士翁教授 (社会学研究科)



青木人志助教授 (法学研究科)



宇佐見洋教授 (商学研究科)



会場風景

◇教職員向けに貸出用として、シンポジウムのビデオテープ (VHSタイプ) が用意されています。機構長室と視聴覚教育教材制作・管理室にあります。

### 第2回教養教育シンポジウム

◇日時：2000年12月21日 (木) 13:30~17:10

◇会場：東1号館1101番教室

◇4年一貫教育に移行して4年経ち、大学院への重点化が完了した現段階で、改めて本学の教養教育のあり方を問い、21世紀における本学の教養教育像を明確にすることが求められています。

◇このシンポジウムは、そのために、4年一貫の教養教育の改革を問い、現状の到達点を確認することを意図して行われました。

◇報告の詳細は、近く刊行される報告集をご覧ください。

◇協力：教務課&教育研究機構助手

第1セッションは、「共通科目の現状」ということで、共通科目を構成する科目群のうち、言語文化科目を除く4科目群(外国語、自然、数理、運動文化)からそれぞれ報告者が立ち、4年一貫カリキュラムへの移行に伴う改革努力の概要と授業の一端が報告された。

塚田富治教授は、「英語グループの試行錯誤」と題して、英語教育のカリキュラム改革の要点と教育内容改善の取り組み、英語統一テストを巡る科内での議論や再履修クラスの指導の様子について語られた。

矢野敬幸教授は、「サイエンスミニマム——理科離れへの対処」と題して、数年前より始められた理科エリアの教官スタッフ全員で取り組んでいる講義「サイエンスミニマム」の趣旨とねらい、その授業内容のアウトライン、ITを使つての教育システム(学生が自分で補習できるプログラム)の開発・工夫の一端を紹介された。

## 共通科目の現状

山田裕理教授は、「数学における4年一貫教育」と題して、数理分野のカリキュラムの全体像とその意図、主だった授業科目の教育内容と学生の履修状況について報告をされた。

高津勝教授と早川武彦教授は、「なぜを問うスポーツの授業」と題して報告され、高津教授からは、運動文化科のカリキュラムの特徴(開講科目の位置づけと内容)と履修状況や現状の課題について早川教授からは、ご自身のテニス授業の工夫の様子が語られた。

報告はいずれも内容豊かなものであったが、企画上の盛り込み過ぎもあって時間不足で舌足らずの思いで報告されたことを申し訳なく、また、「もったいない」という印象を強くした。報告の詳細は、近く刊行される報告集で補っていただき、討論の不十分な点は他日の機会を期したい。報告いただいた方々には、この紙面を借りてお詫びとお礼を申し上げたい。

## 第2セッションの司会を担当して

橋本正博 (法学研究科)



エリアごとにまとまった取り組みがなされている第1セッションの科目群とは異なり、このセッションの対象は、分野や領域にとらわれない

科目群や社会系の教養科目など、主として本学の学部専門教育に携わる教員の担当する教養科目である。現状では、改革改善への取り組みといっても各担当教員の個別的な工夫が中心になる。そのため、各報告は、それぞれ独自の科目設定、授業方法の工夫、担当しての感想等を内容とするものになった。もっとも、それだけに、こうした機会に各自の教育実践についての認識を深め、実績と課題とを共有することの意義は、なおさら大きいともいえるよう。実際、ある意味で分野ごとの専門性が強い第1セッションの科目に比して、具体的教育実践に対する関心はより一般的なひろがりを持っているように感じられた。

## 総合科目の現状

ところで、英語や数学・理科は、学習指導要領の改訂・入試科目の動向などによる学生の側の変動が、比較的鮮明に表れる分野であるように思われる。これらのエリアでは、いわば否応なしに対応に迫られている部分があるとも感じられるのである。他方、本学の学部教育の直接の基礎となるべき人文・社会系統の教育内容についてはどうであろうか。高等学校までの教育内容やその水準等に関する確実な情報を得た上で、十分意識的に対応しているといえるだろうか。両セッションの報告に接して、しばしば漠然と学生気質として捕らえられていることがらの根底に、あるいは大学入学以前の教育内容の問題もありはしないか、と思ったことであつた。

また、大学における教育技術・技法等に関する交流のもつ意味も小さくない。今回のシンポジウムにおけるプレゼンテーション方法自体、さまざまな工夫が試みられていた。もとよりこうしたこと自体についての是非論もあるかもしれない。それにしても、ハード・ソフト両面において、どのように対応すべきかを検討する必要はやはり否めないであろう。

## 第2回教養教育シンポジウムを終えて

大学教育研究機構長 藤田和也



矢野前機構長が始められた教養教育シンポジウムの2回目を、教養教育連絡協議会の皆さんの企画と運営で開くことができたことを大変嬉しく思います。当日は、教務課の佐々木さんや機構の助手の方々のご協力ですmoothな進行ができたことにも大いに感謝しています。

二つのセッションの報告内容も充実していて、年末の忙しいなか報告を準備してくださった方々にも深い謝意を表したいと思いません。それだけに、参加者の人数が予想（前回）よりやや下回ったことが残念でした。本学における教養教育のあり方が学内の少なくない方々の関心事であることは間違いないと思われるだけに、主催者としてはもう少し多くの参加者を期待したのでした。

報告と討論の内容については、現在、報告書の作成に取り組んでいますので、近く皆さんのお手元に届くと思いますが、ここでは、シンポジウムの報告と質疑を聞いていて、いくつかの反省と成果、そして今後の課題めいたことを感じましたので、その点を記しておきたいと思いません。

### <反省点>

一つは、報告者の人数が多すぎて、報告と質疑の時間が細切れになり、いずれも舌足らずになったきらいがあることです。特に第一セッションは厳しかったようです。各エリアからの報告時間を15~20分としましたが、各報告者のプレゼンテーションが時間オーバーし、討論時間がなくなっていました。

しかも、第一セッションでは、各報告にエリアのカリキュラム改革の全体像と実際の授業の一端を報告することを求めたため、時間不足でいずれも中途半端な報告を余儀なくしたことです。これは報告者の責任ではなく、企画側の責任であることは明らかで、改めて報告を用意してくださった方々にお詫びしたいと思います。

二つのセッションを通じて、合計7本の報告があり、全体として参加者にやや聞き疲れの感があったことも否めません。これも反省材料の一つです。

### <成果と課題>

しかし、反面で成果もかなりあったように思いません。

まず一つは、各分野のカリキュラムの改善努力、教育努力の一端を交流しあうことができ、相互理解の機会となったことが大きかったと思います。これまで本学ではこのような交流は一度もなかったわけですから、画期的なこととっていいと思います。こうした相互理解の機会を増やしていくことが、有機的で体系的な全学カリキュラム編成を支える実質的な力になるのではないかと思います。

二つには、特に第2セッションの3報告は、報告者自身の授業の様子が語られ、参加者がゼミや講義のあり方にかかわって啓発された部分が少なくなかったのではないかとされることです。このような授業交流による相互啓発（相互批判も含め）が今後のFDの重要な要素にしていく必要があると思いません。

三つには、今後のこのシンポやFDのあり方にかかわって、いくつかの課題が見えてきたことも大きな成果でした。備忘録のため、以下に箇条書きでしたためておきたいと思いません。

- ・4年一貫教育への移行後の各分野における改革努力の成果と課題（限界と問題点も含め）の整理が必要。
- ・本学の教養教育のあり方にかかわって、テーマを絞ってディスカッションをする必要。
  - ex. 今日の一橋大学の学生にとっての外国語教育の意味とそのあり方について
  - ex. 本学の学生が自然科学を学ぶことの意味とそのあり方について
  - ex. 社会科学と数学、その接点領域と固有性
  - ex. これからの本学の大学院教育と学部教育・教養教育との関連
- ・教官側の改善努力を確かめるだけでなく、学生側からみた授業への意見（授業評価など）とも照らし合わせながら、今後の改善・努力につなげる必要。そのための授業評価やFDに取り組む必要。
- ・教養教育にかかわる教育条件整備の必要なところを明確にし、改善に取り組む。
- ・FDの中でも、新任教員への年度当初のオリエンテーションを実施する必要。

## 教養教育シンポ



“Agora”の創刊を心からお祝します。

小生が藤田機構長の前任者をつとめていた頃、とても気がかりなことがありました。それは教養教育に関係した教員や職員間の共通のコミュニケーションの場が無いということでした。総合的に判断してベターであるとして国立キャンパスへの統合が行われましたが、小平キャンパスはやはり教養教育の共通のコミュニケーションの場としての機能を果たしてきたと思います。キャンパス統合して「前期教官」もそれぞれの学部や研究科に属することとなり差別的待遇が改善されたことは大いに評価できるのですが、代わりに教養教育の担当者として互いに意見交換をするという機会が大幅に減ってしまったのです。これでは教養教育は10年もしないうちに減っていくのではという危機意識から「機構ニュース」のようなものを作ったらどうかなどと考えていました。しかし考えただけで全く実行できずに任期満了

となりました。そしてそういうことを忘れかけた頃、その「機構ニュース」が、“Agora”(P.2囲み参照)として創刊されることになったのですからこんな嬉しいことはありません。そのネーミングからは教養教育関係者だけでなく大学全般にまで広げてコミュニケーションをはかっていくのだという意気込みが伝わって来るようです。大いに結構、まさしく時宜にかなったものではないでしょうか。学内の教育を語るとき“Agora”抜きには語れないというような状況が生まれてくることを期待します。

前置きがあまりにも長くなってしまいました。藤田機構長から執筆依頼を受けたとき、その内容は第2回教養教育シンポジウムについての感想だったと思います。小生、理工エリアの代表として理科教育に関するエリアの取り組みについて報告しました。その際に冒頭で、第2回目が開催されることになってとても喜んでいる旨の発言をしました。「研究」については我々教員は学会や研究会を通じて熱心に議論するのに、「教育」については討論の場が無かったからです。それだけに第1回のシンポジウムの時、2回目も行うとした小生の果たせぬ「公約」を藤田機構長が実現してくれたことは感謝に堪えないのです。

「果報は寝て待て」とはこういうことをいうのでしょう。

## 訪問！ 機構関係の教材準備室等の紹介 第1回

### 語学ラボラトリー

場所：東キャンパス：東2号館1階

語学ラボラトリー(略称LL)は、東2号館の1階にあります。2つのLL教室ではおもに教養教育の外国語の授業が行われています。

今年度の新しい企画として「世界の言語入門」教育教材研究開発プロジェクトを立ち上げました。一般には学習機会の少ない言語を対象に教材の開発研究をし、授業や学生の自主的な学習をサポートしようという試みです。

今回取り上げたのは、セルビア語、ポーランド語、沖縄語、中国語の4つの言語です。テキストにはいずれも「星の王子さま」を使い、ネイティブスピーカーの協力も得て翻訳を考え、スタジオで録音・編集しました。これをどのようにまとめるか、現在模索中です。

新たな挑戦に試行錯誤の連続だったような気もしますが多くの人による共同作業の楽しさを知るよい機会でもありました。実際に見聞きする機会の少ない言語を目のあたりにし、そのことばが持つ美しい響きを多くの人にお届けしたいと思っています。

### 視聴覚教育教材制作・管理室

場所：東キャンパス：東2号館2階

ライブラリースペース、編集スペース、録画・ダビングスペースからなる室内はAV機器やソフトでいっぱいですが、見通しがよく気持ちのよい部屋です。同じフロアのAV教室3室のほか、学生が自由に映像資料を閲覧できるAV自習室の管理も担当しています。

急速な技術の発達にともなって、視聴覚教育の質はここ数年で大きく変わってきています。特にパソコンの利用が飛躍的に増えつつあります。視聴覚教育といえば、以前は教官が講義の補助として視聴覚教材を提示するというのが一般的でしたが、学生が撮影してきた映像、またはコンピューターで作成した画像をレポートとして提示する参加型の授業へと変わってきています。卒業論文の一部として映像を使用するなど、新しい利用が次々と始まっています。目下、このニーズに応えるため、撮影スタジオの整備を大きな目標としています。

変化の激しい今だからこそ、先を見据えた大胆な計画性ときめ細やかなサービスを心がけたいと思っております。



## 平成12年度大学教育研究機構年次報告

2000年4月1日～2001年3月31日

(学内委員会)

- 大学教育研究機構運営委員会  
2000年4月6日／5月31日／6月28日／10月18日／  
12月6日
- 教養教育連絡協議会  
2000年7月26日／10月19日／11月16日／12月7日  
2001年1月18日
- 教養教育教官会議  
2000年5月17日／2001年2月14日
- 共通科目担当教官会議  
2000年6月28日／2001年2月14日

(学外会議)

- 国立大学教養教育担当組織協議会  
2000年6月8日～6月9日 横浜国立大学にて

(その他の活動)

- 一橋大学 Faculty Development  
(第2回教養教育シンポジウム) 2000年12月21日  
(教務課・教養教育担当：佐々木クニ子)

## 教育研究機構所属助手一覧

2000年3月15日現在

"大学教育研究機構"に所属する助手は16名です。

\*：機構所属教材準備室等  
数字：内線番号 (ダイヤル) 042-580-XXXX)

- 多田洋子 : 数学統計学教材準備室\* : 8981
- 清浩子 : 数学共同研究室 : 9060
- 鈴木令子 : 情報教育棟 : 8445
- 三東玲子 : 視聴覚教育教材制作・管理室\* : 8990
- 小林妙子 : 視聴覚教育教材制作・管理室\* : 8990
- 根本節子 : 生物学研究室\* : 8949
- 小林美穂子 : 化学・物理学研究室\* : 8982
- 辻村とも子 : 地学・情報科学・環境科学研究室\* : 8948
- 中村万里子 : 語学ラボラトリー\* : 8992
- 福田明子 : 語学ラボラトリー\* : 8992
- 菊池美紀子 : 語学教育準備室\* : 8980
- 増沢真理子 : 語学教育準備室\* : 8980
- 鈴木奈緒美 : 語学研究室 : 8800
- 三條和子 : 語学研究室 : 8800
- 関根美智子 : 運動文化教室\* : 8131
- 渡辺富子 : スポーツ科学研究室 : 8270

## <編集後記>

● 機構の仲間たちの気持ちに乗せて「Agora」が启航しました。レイアウト作りが楽しくて、あ-でもない、こ-でもない夢中になりすぎて気が付いたら次の日になっていたことも。かなりの独断と偏見がはいつている？。話は変わりますが、もうすぐ21世紀の新学期がスタートします。気持ち新たに、仕事は楽しく、こだわって、出発で～す。(L&)

● 国立で大学生活をスタートさせ、20世紀の締めくくりの4年間を国立で終える学生が、この3月、卒業していきます。小平から移転して4年。大学のワンサイクル・4年が終ろうとしている今、おりしも「Agora」が発行される運びとなりました。編集に参加させていただいたことは、私たち教養教育に携わっている助手も移転後の4年間を考え、自分たちの仕事を振り返るよい機会になりました。(W)

● 編集後記を書くなんて恐れ多くてたまりません。編集委員とは名ばかりで、何もしていないのですーごめんなさい！一度打ち合わせをただけで、仕上がりも同然の立派なサンプルができて感謝感激でした。学内みんなの広場に育ちますように！(mi)

- 「頼もしい 身も気構えも M編集員」  
「手際よく 連絡、資料作り W編集員」  
「黙々と 校正うまい K編集員」  
「ご免なさい 口出しアヒル お茶の番」 (y.t)

● 4年一貫教育となって早5年、大学教育研究機構の唯一人の事務担当をしてきました。これまで、組織が不明瞭で、理解されないこともたくさんありました。創刊号の発行ができ、私たち、機構の役割をわかっていただく機会になったらうれしいです。(K.S)

### ■ Agora

■ 発行 一橋大学教育研究機構  
■ 〒186-8601 東京都国立市中2-1  
TEL 042-580-8000(一橋大学)

■ 創刊号 2001年3月15日発行

■ 編集 機構ニュース「Agora」編集委員会

TEL 042-580-8118(教養教育担当) TEL & FAX 042-580-8130(機構長室)